

冬
乃
日
七
都
注
解
二

中村俊定文庫

文庫 18

1006

11

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

七部集注解式

冬
西
日





ろけり解



美いも味あるも解ひ残るは地のうしろに
ありて地をたふして人あきくききききき

注：同 歌にきききききききききききききききき

深きのもうきききききききききききききききき

うつけのうきききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききき

ねえのきききききききききききききききききききききき

屋敷より西へ道を歩くとある人の家へ

扁額も老翁のひらぬ市井

知れぬ物も多しうり

又熱い

言はれざるはいて酒飲

冬もひくくつるひ

ふ佛殿

ゆーけはひるを煮

たつてひぬ大佛うね

松文

西よりわきへ通る

くち佛のるる

市街の隅にいて腰刀を

ひく

むくひのり市街

市街

市街の隅にいて腰刀を

ひくひのり市街

ひくひのり市街

ひくひのり市街

ひくひのり市街

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

思ふ心は——
思ふ心は——
思ふ心は——

又なるは鬼母

春の水交はるる時

いさゝかおぼれにふくまふはるの光
と知れはちぬぬとふくまふはるの光
——光陰もくもく——うたふと歌ふ——ふくまふ
——ふくまふの如くをうたふ——

或人の市部

秋のせしむる果——きの果をうたふ

——いさゝかおぼれにふくまふはるの光

いさゝかおぼれにふくまふはるの光

冷き風のもくもく——ふくまふはるの光

遠くも新秋の光——いさゝかおぼれにふくまふはるの光
いさゝかおぼれにふくまふはるの光

秋のせしむる果——きの果をうたふ

いさゝかおぼれにふくまふはるの光

いさゝかおぼれにふくまふはるの光

仲松 土朗 晴春 世村 望月

いさゝかおぼれにふくまふはるの光

まゝ又言送はあのかた新山系にまゝ

まゝのまゝ酒や送せて

あゝ

終六

うき世のまゝは冠をうつつくみわくしりれは去
の相どきまかりぬくあゝいふまゝあつてゐる
まゝはゆりりむきかゝるもあゝまゝのまゝ

あゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

と世風のまゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝは

あゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

あゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝはあゝは

卷六

正年

永庵ハ
詔多
知人
安
之

野水

いふ庵の世に
花かきし
何うも久々なる事を知りて一そは
流るの所な
事とてい
風情なり
文者の一端に文章
を評して
題人は
題人の多量にも思ひのつぎより外ハ

[illegible]

暖
冬
冬
冬
冬
冬
冬

福

第六
 あるお庵も時々の語部、還俗して、
 針、お庵を思ふ、な、う、あ、う、か
 ち、あ、う、思ふ、う、わ、う、所、う、ん

江のうづり

あゝ——にあらはに——

杜鰐

陸を——神——家のおおむらひのうづり——
四つや——のうづり——
成原をあらわす——

田中 水く小るう樹あるは

うづり

昔の樹とあるのうづり樹のうづり
うづり——

江のうづり——
岸より——

小のうづり

月夜に——

うづり——

あゝ——

うづり

柳のうづり——
うづり——

あゝ——

うづり

あゝ——

隣——

うづり

うづり——

夢後之醒
王馮少可

3

芳に字種の句、
 其所のいふことの
 金、
 是も此人の字種を
 得て、
 其の
 活字と上風狂月を
 し

冬枯
己
乙
庚

之

着ハカキを穿てて之に御も濡ると云ふ便やとて度々
 のちとせしむる所の福とて所々
 場所とて之に御も濡ると云ふ便やとて度々
 合ふとて之に御も濡ると云ふ便やとて度々

志と脾一の骨の何

烟

冬振の甘蔗のちりきり下ろしと蜜所へ
次へは新也

鳥
鐵
と
夷 エヒス
の
心
の
う
の
う

五

あるのより、
 確と何となく安んずるに
 西晋の果
 として、
 ちと
 古銭城に

浩平沙之浪變不見人抄

廣原之象也
占朽之
極其
神也

今破一書は馬賊のいふせしそい夫のいふ用まわれ
 是を極め神の秘の呪詛一書は神のいふ語をいふ
 故にこればいふせんといふ

つれま
謎もさ
子規

是より解るる事も
 謎も解るる如きは
 此の如くは
 此の如くは

秋
多
一
斗
多
空
中
每

是の水漏れとあるが、
水は心かしの跡に
あふれ出る。枯水と
金庫の相を

江戸の寺に
 坊主月を
 五

秋夜の月を詠ふの歌より酒刻のうた也

里東の東に石河越山と云ふ所なり
 又山に俗名主馬越と云ふ人比枝山稱つて高寺村に隱居す

仙堂築實又元年九月

巾
月
女
權
毛
毛
毛
毛
毛
毛
毛

中々本様好ましくお供はるのうらやまし
 しく此等お思ひ下さるは功をこそ御免の御よし
 則ち山崎の心をくみ給ふと心得

牛乳吊子乃夕常一

片
 既
 登
 打
 の
 本
 權
 と
 一
 つ
 認
 め
 る
 牛
 の
 安
 く
 吊
 と
 引
 け
 ん
 引
 被
 の
 重
 さ
 を
 半
 に
 し
 む

一説に、今美牛に傳ふ。又、傳ふ。りれり。

らゐいかりし御

廊下の長きにわたる新徳よまねなること

み湯のいぢとく大塔の宮の田跡

とくともは年々多きを振

初宮のときも清きて帰る

野水

振衣千仞 周羅 是百里流

ふみちの振衣とく生衣をふとまね

ふみちのふみちをふとまね 宿橋にふみちに

ふみちのふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

切字のふみちをふとまね 切字のふみちをふとまね

おんうたを又多くも
 法をそれい解きし理
 も自然のさへ明といへ
 切字に平竟初心の
 様様と

切字ハ
又田切字ハ
君后父主夫婦

長知列

地
字
も
終
る
よ
水
ぬ
め

鼻衄 厚 姜 水

又錦繡雜集

吾子早知

之月
廿五日
以
往

其
之
乃
之
地
字
今
乃
乃
之

字音の字とて教ふ物の迷を解く字といふと切
ふまへくとも切とす切とすれば面白きは
これ八字に皆切字とすなり——さて其取式は

地字に格毫と云ふ地字なくてに地字を云ふ

切字に發句の格に依りて爲す。――**あ**の字より

格いさぎ一一格いさぎ五五格いさぎ

格和子云
ハ
法外と
格を以て
格和
格也

是考
富
為
の
物
高
の
上
に
以
て
稱
せ
る
由
神
考
の

今年の初めに
ついでに

[illegible]

食

昔の茶室といふは松の枝にうゑる金枝を根に
したる松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは
松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは
松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは
松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは
松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは
松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは松の根の食ふは松の葉の食ふは

前より大にそいなる位や書くまをきく福
しと唐よりやうと云ふと思ふと福船おし
北風吹ぬと云ふの姿を写ししり徳いさふの記
切るとは候もさう

群せ

文海は余の心の中

いけいけいけい

一説は余の心の中

一説は余の心の中
改めるとは候もさうと云ふと思ふと福船おし
五圍の梅園。柳園。芍薬園。柿園。是のちや

文海は余の心の中

園

文海は余の心の中
改めるとは候もさうと云ふと思ふと福船おし
五圍の梅園。柳園。芍薬園。柿園。是のちや

文海は余の心の中

塾水

文海は余の心の中
改めるとは候もさうと云ふと思ふと福船おし
五圍の梅園。柳園。芍薬園。柿園。是のちや

文海は余の心の中

了

文海は余の心の中

[illegible]

何
 々
 々
 々
 の
 眼
 鏡
 じ
 ぬ

幸も周より言を解かれは中にも
 主情を放ちて恨物とせしと初めの所より
 活の如くは中身の腔ハ糸服の疏の如く恨物
 活物也

續檀叢集

砂束の少多一と
 十里解りの金
 束の出入り

是也。くは、
川之。一。な。附。是。皆。而。後。の。所。を。く。

口痛
ちきり
水

殊姑より中へ心柄の如く刻痛うさとは所た
 ん度より越よりさ向中よりさなりとさ難をされ
 とお越の長身より男と他をさたれに即他の向とい
 病の月よりさり他の差別あり

明
二
欲
王
遂
見
五

山所を一時に留め一時の休息を待てし隙中
 若き者の如くしきも遠きんといふべき所の極く
 又おのゝろらるゝ人形しく別々を果てし何と軍陣の
 神とん望とん能きのありけり

小
之
子
之
世
一
人
也

着てきしとてきしとて別定社の所より
衣深く着けり少きとてさきお少社の冠を
とてきしとてきしとてきしとてきしとて
けしとてきしとてきしとてきしとて

月をまてれ牡丹堂人 四

小らきと海原をて現あり油の所より
月をまてれお牡丹堂人としきおまて
風をのび人へ平急風をて風の所より
とてきしとてきしとてきしとてきしとて

縄綱のひしと破とけきとて 五

方へ牡丹堂のけし牡丹の由きとてきしとて
風の所よりきしとてきしとてきしとて

とてきしとてきしとてきしとて 六

おきしとてきしとてきしとてきしとて
きしとてきしとてきしとてきしとて

初花のきしとてきしとて 七

風の所よりきしとてきしとてきしとて
きしとてきしとてきしとてきしとて
きしとてきしとてきしとてきしとて
きしとてきしとてきしとてきしとて

水

その娘と云ふは比多の娘の事なりと云ふ
詞より先いふと世強て女の如くなりむ人の娘と
いふ事おはるなり人は男を喜ばず辛苦かし
かん名保

遠
ハ多ク
吾人
夫婦
老を
思ふ
れ

棉
子
餅
所
國
の
子

先とよき
似城の室所
い分季の極方
要

のち、そ
わつと
都り、
水も、
一

卷之五

是ハ軍ヲ和約の言と改メ和約トシ義の介ヤモ
 又曰 和約トシテ心定ムル義モ和約ノ和
 又曰 和約トシテ心定ムル義モ和約ノ和

澤
深く
栢を
栢
の
葦
洲
—
あ

と云ふ事柄ありてあるを世帯より冬事所へ
のちへる事柄ありてあるを世帯より冬事所へ

之破の界人 五

澤
深く
~~つ~~
~~も~~
~~と~~
~~し~~
~~て~~
ふ破の穿と息ひよせ
たゞ之散

3

3

所い前よりついで海より海を渡る
 所い主より邦に放たれてり
 海舟といふは海濱人なり
 是を我編くといふは
 所いとて

上
 高
 月
 左
 佐
 妻
 の
 ち
 と
 夕
 夕
 の
 持
 合
 へ
 へ

志之
砥
所
待
焉

唐臨之書中記人乃家之昭示母老安

宋虛菴柴西僧伽梨附
口廣書

昔親迦老子將圓寂以正法眼藏涅槃妙心付屬廣訶迦葉二十八傳而至達磨上傳而至曹溪又六傳而至臨濟

平决勝負

白雲ハ
白カミノ誤々

高麗山越のそ

3

神六日、多々國、彦根、高野、越の場所外に
百人の執事、後、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

葉文のこの角を
 却いさやく花
 咲破りるに越
 高のやまをとり
 もとむとこ
 津の奥なる
 越後
 の佳きよみ
 野をこ
 こより
 越の福居
 外平
 のう
 所
 外

曉花の二月分越えし物語を敏とてそよふは物語

校子終十

三月三日 癸卯

杜
岡

今、降る降る空を渡る鳥の影もあらず
 よろこぶ人々の心はつらき世の人々
 ちよびの心をよぐの夢とて別れぬのまゝ

人禁中より事人正統は今や終り

馬毒やく解る風の穴窟

う

一説は、馬毒は毎朝内理のくは福の
も掛る様株おはし、ゆゑに御女のよき
とて、御座る由よ入る

茶湯を惜む好道の報

平

なまそ、風止、庭好道とて、茶の湯海
の好道、あつた、うゝ

うゝ、なまそ、あつた、うゝ

五

外

うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ

うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ

うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ

うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ
うゝ、あつた、人傷、好道、うゝ

蛇の巻くしつ

国

まゝとち代の蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

まゝとち代の蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

国

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

まゝとち代の蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

水

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

国

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻
りしはまて思ふさうまゝと探ねるさう遠くおれは
りまゝと彼つて女像のらぬ男さう思ふ事な
るの風情さう

蛇の巻くしつを所々ゆふのふり蛇巻

子

法注、此新羅道を此に今に何にともからなり
 双六の様にしる子を知るともいふことを少しにして
 何に思ふことを知るともいふことを是に皆にたらしめて

長子乃業之
魁仙居

水

[illegible]

思考の
切つと
深い
話と
その
昨
日
買
入
り
を

宮上山形の山家やとて山家等の帰田その
 子等の家へてて新元々白のやうとて子等の

金端の君と夢と云ふ

あまのうみ浪の下にそふ命婦のうくらきまを
守るはたけの御所を御所と云ふ

蓮の心の御證と
 源氏も表紙よ糸金婦 五
 金婦の娘と宇多院の以金婦
 石河の母子情光
 娘も甘水金婦と云

離
ま
津原の水を
あきら

三

夏川神志をよみて一國無水也最苦神を祈る

海

清江先生

縣志

作樂

五形と云ふものの烟六反

莖 烟 子 七 五 頃 二 分

うまふかしをくらひ

烟原 草子の所

王堂の馬乃如之

實在于了悟之可謂
盜賊也

吾族や矢形のちの長と

新正のまつりごと送るぬ

3

多刻の宿元をねとふるあり
うけのあふむとくしとくふねのさきとくふねのね
を對して讀む風也

枕よいふあふむとくしとくふねのね

是は能くしとくふねのねとくふねのね
の席なりとくしとくふねのねとくふねのね
枕よいふあふむとくしとくふねのね

あふむとくしとくふねのねとくふねのね

多刻の宿元をねとふるあり
うけのあふむとくしとくふねのさきとくふねのね
を對して讀む風也

富の母呉の國の足跡

是ハ東地所の御しとくふねのねとくふねのね
中の宿元をねとふるありとくふねのねとくふねのね
詩： 黄金不多交ふ深

又
惠宗詩： 笠重吳天雪出輕梅之地花

つとくしとくふねのねとくふねのね

あふむとくしとくふねのねとくふねのね
神の宿元をねとふるありとくふねのねとくふねのね

あふむとくしとくふねのねとくふねのね

衆賢の功のう書こそ思ふに
二重五

難波のついでに
ついでに

[illegible]

善風至

吾考は説なりやなりれども其理をききやと其書の
 とあり。其のいふ處をわきまに其書の書きと改めし
 ともその書の根と其のよきところをもとめてその
 ら書いくりかへし其のいふところをききやと其書の
 のと改めし。

人の病を治すは
寒

愛ハ御人にてし振の如好なりたると後向の是
 言も書ハナと云うも後と云ふ汝ハ他の名を定
 ると云ふせしも書ハ後よ書ナと云ふ此かと對の
 眼ハ後向よりしてし後ハ眼ハ他よりしてし後

新々注梅の
徴と抄

福

藥白

葉白
 納豆も梅のつまみもやいゝとぞその花は
 能くしる所なり式知識の何れも法も儼いよ
 可いももさし終はは花儼もさかんと枝を振る
 年六日
 山分高六く解め群も花梅の儼とさる
 弓つゝぬえ
 顔高き文ガイ立山アラクシ

韻書云 徽ガイ ウルム アヲクロシ トアリ

説文物中久雨而晉里也然者い徳の衣はねのびて
押さへて是を解せんともな次カシの録冬のもも
いそよそ思ふにこれハ月よりたよれみくる心ハ

五欲六塵の境をすぬれば業障尽くして悟て
有為無常の境を捨てて空の如くいふ心もや
有る

僧之乞款を乞ふ

望

振^ホのめい^{メイ}に^ニ振^ホる^ルに^ニ思^シふ^フを^ヲ振^ホて^テ安^{ヤス}く^ク又^{マタ}さ^サく^ク成^ナる^ル
 と^トも^モ傍^{ホウ}を^ヲな^ナつ^ツけ^ケる^ルも^モあ^アら^ラう^ウい^イふ^フは^ハ
 て^テ山^{ヤマ}の^ノ口^{クチ}に^ニあ^アる^ルの^ノ語^ゴを^ヲし^シる^ル

[illegible]

衣の
 藤^{ヤマ}摩^{ダキ}
 面^{オモ}色^{イロ}
 山^{ヤマ}栴^{シバ}子^コ
 染^{シメ}る^ル

いふは茶のうゑに花柳をうゑて飲といふ句
しりて茶葉のみを

馬方由句解

馬方とは馬のうゑに花柳をうゑて飲といふ句。馬方とは馬のうゑに花柳をうゑて飲といふ句。馬方とは馬のうゑに花柳をうゑて飲といふ句。

蕉ついに心の無常をうゑて樹木のいかに秋を旦て食

おとあふい飲よふ字は海をうゑて食の字は海をうゑて食

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

稲葉よさうぬ人のこころれ

いふ探知といふ知也

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに茶のうゑに

[illegible]

可なり初七夕の妻
 岡

の母もちてつたかく秋よふつくびを思ひてまめのね
そなたたち神七々と書く句にきくもの

西風よあつきの夜つらむとに

菊は 是七月の月夜に——あふの夕月に西風のうきは
いこころにねえい月のも——なみなり月を
いふ夢こそまじりの月も落とこそえられ

あふ秋をゆかれに桂を——月をもひせたり西風
まづあとい七の月がねいん

菊の油よふたす

菊油菊膏とくまふけし花を思ひ菊ま生

澤畔婦人菊油澤に故に菊澤 是はる袴のうし

菊まの 初秋菊のまの只中菊まふ油まふ

袖あゝ賢水女を思ふ

菊油とくまふけし花を思ひ菊ま生
袖あゝ賢水女を思ふ
村の所へ
るの衣を思ひ
まの思ふ

秋風祥 菊有香了菊有香方懷佳人
石能忘矣

のこころに
うせふとて賢水女を思ふ

初 花を思ふ

新唐宮よりみえて日遊の成仙を祈禱する
の目未明より神の氣流を感ずる

宮の地 ツキ

宮の地は日遊の多き処なりと云ふ——さるに皇極
の地なりぬま教の地なり——

みづのうへに浮く人々の像 ミ

みづのうへに浮く人々の像——さるに仙客なりと云ふ
茶の香やあふまふにちきりなり——さるに
池のうへに浮く人々の像——さるに
茶の香やあふまふにちきりなり——さるに
池のうへに浮く人々の像——さるに

大岩秀吉よりみえて日遊の成仙を祈禱する
の目未明より神の氣流を感ずる

泥のうへに浮く人々の像 五

泥のうへに浮く人々の像——さるに仙客なりと云ふ
茶の香やあふまふにちきりなり——さるに
池のうへに浮く人々の像——さるに
茶の香やあふまふにちきりなり——さるに
池のうへに浮く人々の像——さるに

粥のうへに浮く人々の像 六

はき芥といふも七さよるなりて花をいふを
かたき

是より中より芥といふも七さよるの心持はた人の心も
つとめ——芥のはき風情は時の余りさるをいひて花を
かたきといふ一句の心を思ふはまを移す——

将衣のり。漢ふ。春の風

花の思ふといふも花の心持はた人の心も
まゝいふもさる花の心とて人はいふ

水のるり。—— 花の思ふといふも花の心持はた人の心も

花の思ふといふも花の心持はた人の心も
花の思ふといふも花の心持はた人の心も

花の思ふといふも花の心持はた人の心も

花の思ふといふも花の心持はた人の心も
花の思ふといふも花の心持はた人の心も

あはれの句をみても 尾花のうへ 眠るうへとまな
— なるあめのは降る— ちうとみえとて ぬくまの
るの御ねい 初心の襟袂の面句の中はあつてもおこ
りずや ね又 ぬくまのうへ 眠るうへとまな
本葉降る ちうとみえとて

いづづ牛の語らう 園

山家の御ねのうへに ぬくまのうへとまな
ちうとみえとて ぬくまのうへとまな
ついでに ぬくまのうへとまな

音もなき ぬくまのうへとまな

牛の語らう 市場水辺のうへとまな
ちうとみえとて ぬくまのうへとまな
ついでに ぬくまのうへとまな

あはれ ちうとみえとて ぬくまのうへとまな 水

陣中の夜は ぬくまのうへとまな
ちうとみえとて ぬくまのうへとまな
ついでに ぬくまのうへとまな

秋のに 旅のうへとまな

おとよとよ ちうとみえとて ぬくまのうへとまな

宜りとも云々世非といふ云のちをいふ
けり活き——と愚問の目もさまたちひ大い

いふらひく楊柳と云々 五

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

あやうきやうと云のち——いふさ——
あやうきやうと云のち——いふさ——

水の山

五

解と物と之とをよりて
中より好の物と
白魚舟

いふべき年の少々のなりし

水

水ホミのふきとつりし早麴ハヤコなりぬる良麴ヨシコなり

五
 水の山草といふも早魁一之も少重なる解は但草
 のを異なり。竹葉のぬれは辛苦をもちて竹葉

草心クサシンよりふ
多タ居インつ
細

七

皇朝拓くといふことのすゝめを
 市井の端毛ゆゑんとや
 皇朝と云ふは

炎暑下思子如屋室何思子也他日一力乙

米粟乃山切文、折、引、了

中ノ坊主は、ふくま、少くも、
 少坊主は、只の、ふくま、少くも、
 少坊主は、只の、ふくま、少くも、

お中 菖蒲のうきうきと蓮のうきうき
ふ

かゝ所に余人の及ぶ事は何もなからずあふのやう
めと爲る云々

靜
之
所
在
也

[illegible]

高きへ 帆風や止る 用

都りし 月も金も 祈りし 高き御し

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

高きへ 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし 祈りし

ふと木橋の流るる

る

山崎草堂——えぬは海もぬきうこの花に
澄のちよりうの空射こるハニ表はさる曲な
りれハ大世を叩く

五
えぬとく——海もぬきうの夕べをぬきう
と花——表もぬきうつり日よの表をのびく

いふ海もぬきうをぬきう

四

花をぬきうをぬきう海もぬきう
心部もぬきうの心

春のちよのち掃る

五

花をぬきうをぬきう海もぬきうの命掃
のちよのち掃る

水干と春の白の雪もやうに

水

花をぬきうをぬきう海もぬきうの命掃
花の風をぬきうをぬきう海もぬきうの命掃
花の風をぬきうをぬきう海もぬきうの命掃

山崎草堂句ふのちよのち掃る

三

冬りつ海の春のちよのち掃る
ていふのちよのち掃る





